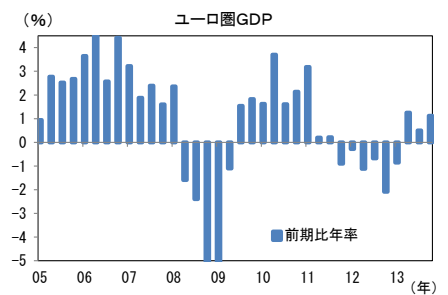
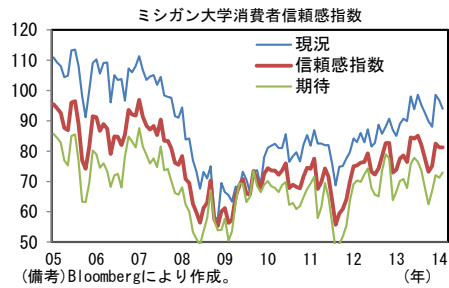
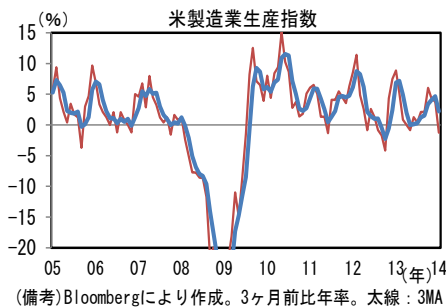


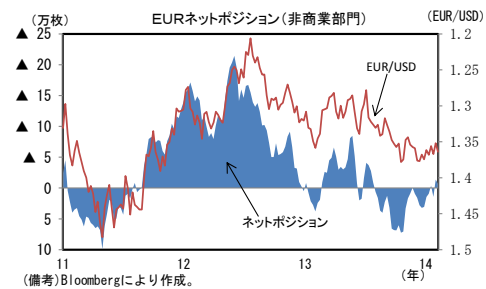
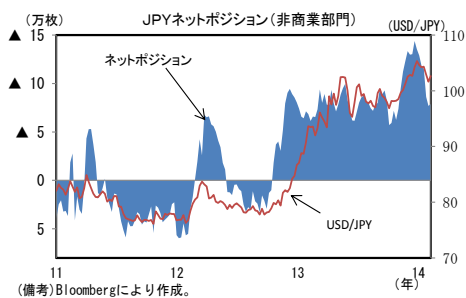
【海外株式市場・経済指標他】 ～消費者信頼感：期待指数が回復～

- ・ NYダウ平均株価は前日比+126.80ドルの16154.39ドルで取引を終了。S&P500は最高値更新まで10ptに迫った。
- ・ 1月米鉱工業生産指数は前月比▲0.3%と市場予想(+0.2%)に反して減少。寒波に伴う暖房需要から公益事業が+4.1%と増加したものの、製造業生産が▲0.8%と下押し。なかでも自動車・同部品は▲5.0%と大幅減産。また、過去分についても製造業生産(4Q)は、前期比年率+6.2%から+4.6%へ下方修正された。設備稼働率は78.5%と前月から0.4pptも低下(市場予想：79.3%)。
- ・ 2月ミシガン大学消費者信頼感指数は81.2と前月から横ばい。悪化を見込んでいた市場予想(80.2)を上回った。悪天候や金融市場の波乱により現況指数(96.8→94.0)は予想どおり悪化したものの、期待指数(71.2→73.0)は改善。先行きについて、悪天候により先送りされた消費の回復が期待される。
- ・ ユーロ圏GDP(10-12月期)は前期比+0.3%と市場予想(+0.2%)を上回った。3四半期連続のプラス成長であるうえ、大半の国がプラス成長を成し遂げている。国別ではドイツ(+0.3%→+0.4%)、スペイン(+0.1%→+0.3%)が加速したほか、フランス(0.0%→+0.3%)、イタリア(0.0%→+0.1%)がプラス成長に回帰。先行きについてもPMIなど各種先行指標は、これまでのところプラス成長を示唆している。米景気鈍化や新興国経済減速など不安材料は残存するものの、それがユーロ圏の景気後退に繋がる可能性は低い。良くも悪くも緩慢な成長が継続する、と言ったところだろう。



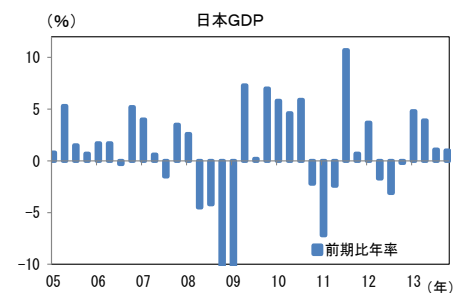
【外国為替相場・債券市場】～珍しく日本GDPに反応～

- ・14日の海外時間はUSDがほぼ全面安。アジア時間に進んだ米金利低下がUSDの重石になり、USD安主導の展開。USD/JPYは欧米株ラリーにも拘らずもみ合い。17日日本時間では日本GDPのヘッドライン下振れに反応して一時101.40近傍まで水準を切り下げたが、その後は日本株持ち直しに沿う格好で101.60まで戻した。
- ・米10年金利は、強弱区々な米経済指標を受けて方向感に乏しく+1.1bpの2.743%で引け。欧州債市場はユーロ圏各国GDPが健闘するなか、コア国軟調、周縁国堅調の展開。GIIPS対独スプレッドはタイトニング。
- ・CFTCデータによるとJPYネットショートポジションは7週ぶりに拡大(7.68万枚→7.88万枚)。EURは前週に大きくネットショートに傾斜した後、再びネットショートポジションが縮小(13.6→0.7万枚)。なお、S&P500先物は2012年9月以来ではじめてネットショートに転じた。



【国内株式市場・経済指標他】～USD/JPYが物語る～

- ・日経平均株価は前日比+80.08円の14393.11円で取引を終了。GDP統計を受けて一時マイナス圏に沈んだものの、前週末の欧米株高など外部環境の好転から買い戻された。
- ・GDP(10-12月期)は前期比年率+1.0%と慎重な当社見通し(+2.0%、コンセンサス+2.8%)を大幅に下回る弱い内容。ほぼ全ての市場参加者が前期(+1.1%)からの加速を見込んでいたこともあって、期待はずれの結果だ。公表直後にUSD/JPYが珍しくGDP統計に反応したことが、それを物語っている。下振れの主因は外需。輸出が前期比+0.5%と低い伸びに留まる一方、輸入が+3.5%と大幅に増加した。基礎統計で既に明らかになっていたことだが、改めてみるとショッキングな内容である。詳細は「2013年10-12月期GDP(1次速報値)～内需は好調だが、輸出が伸び悩む～」(新家 義貴)を参照されたい。



【注目点】～春まで辛抱～

- ・米国の悪天候という予想外の出来事を前に日本株・USD/JPYは苦戦中。残念ながら、筆者の強気見通し(2014年末：日経平均19000、USD/JPY115)の背景にある「米経済の3%近い成長」は下振れリスクに晒されている。悪天候により停滞を強いられた経済活動は、その大半が春の訪れとともに息を吹き返すと見込むが、それを統計で確認できるのは4月頃になる。それまで投資家は米指標のネガティブサプライズに対する警戒を怠れないだろう。目先、日本株・USD/JPYともにリスクは下向きと判断せざるを得ない。